

祖述と更生

目次

- 一 はじめに
- 二 「祖述」という生き方
 - (一) 聖人の生き方
 - (二) 父母の教え
- 三 「更生」の意義
 - (一) 更生館の意義
 - (二) 「更生」論の背景
- 四 まとめ——廣池千九郎の遺志——

井
出
元

一 はじめに

「今一段聖者とならずば、モラルサイエンスに生命なきこと」⁽¹⁾。この言葉は、大正十四年七月、廣池千九郎が自らの「日記」に記した誓詞である。廣池にとつて「聖者」とは、人類の教師（聖人）たちの遺志を継ぐ人物の謂いである。聖人とは、神の意思を体現した人物であり、人類に普遍的な価値の所在を開示した稀人であった。そして、聖人の生き方に倣い、その遺志を受け継ぎ、自らの人生に活かしていくことを「祖述」と称した。

また「祖述」とは単に知識に止まるものではなく、人生の全体に関わる根本的な精神の転換を前提としていた。つまり、人が聖者になるとは、人としての自我を完全に脱却し、神の意思の実現に全霊を捧げるといふ覚悟と、そのための人格の陶冶をめざすことであった。このことを廣池は「更生」と称し、それは、あくまで現実の社会と遊離することなく、人々の安心と社会の平和とを求め続ける実学でなくてはならなかった。

冒頭に引用した言葉は、聖人を敬慕し、その生き方を祖述しつつ、より一層の更生を目指すことによって自らの人生の課題を全うしたいという誓詞なのである。この「祖述」と「更生」という概念は廣池千九郎の人生に一貫するものであり、当然のことながらモラロジーの教学の根幹にかかわるものである。そこで本稿においては廣池の人生における「祖述」という生き方と「更生」を志す意思を通して、モラロジー（道徳科学）の実践的な理解を目指したい。

二 「祖述」という生き方

(一) 聖人の生き方

まず廣池にとって「聖人の生き方に倣う」とはどのような意義があったのであろうか。

孔子に倣う 昭和十二年七月、開設まもない群馬県の谷川講堂に当時のモラロジー会員の主だった人が五十名ほど集められ、研修会が開催された。この研修会は廣池にとって最初で最後となったのだが、六日間にわたって自ら連日演壇に立ち、中津を出て以来の自らの体験を回顧し、モラロジーが形成された経路を語った。そして「私には内外の困難があった。反面自己反省して至誠慈悲になることに四十年かかってきました」と述べ、^や「どんなに困難があっても止めてはだめです」と訓じた。そして、その講話の中で、「陳蔡の厄」といわれる孔子の事蹟をとり上げて、次のように述べている。

孔子は楚の国から頼まれて高弟(弟子)を連れていこうとすると、陳・蔡の野で困難に出会った。それは孔子を楚の国にやっつては我々の国が危ないと考えたためであった。そこで弟子たちは

「先生、知は困難するが、道徳は幸福になると教えられています。私たちがどうして、このような苦しい目に遭うのでしょうか」

と孔子に質問した。すると孔子は

「聖人は困難するのである。今、それらに会っているので、これに耐えられなければいかん」
と応え、子貢に向かつて

「お前はどうか思うか」

と質した。すると子貢は

「余りに先生の教えは正直すぎるので、先生の教えを少し曲げて、今の人に合うように説けば良いと思います」

と答えた。次に顔回を呼んで

「お前はどうか思うか。皆は教えを弱くせよというがどうするか」

（著者注 教えを弱くするとは、教えの程度を低くして世の中に迎合することをいう。）

と質した。すると顔回は

「それはいけません。皆が帰って行っても私は先生の通りに致します」

と答えた。孔子は顔回を非常に褒めて

「お前がもし大商人であつたならば、私がお前の店の支配人になろう」

と言ひ、大いに安心したということである。こういう場合には正しいことについて行く者だけが勝利を得るのである。聖人の道を曲げる事はないのである。^(と)

孔子が生涯において最大の窮地に陥っている事蹟に思いを馳せ、その渦中にあつても道を志し、それを貫くべきだという顔回の意見を通して、天命を確信した孔子の意識の高さを示し、それを自らの人生に重ねていたのである。つまり、孔子の事蹟を例にとつて自らの人生を語る廣池は、その人生が常に聖人を祖述するものであつたことを知らせると同時に、研修会に集まつた将来を託す門人に対して「顔回のような弟子にな

れ」と、孔子から自分（廣池）へと受け継がれた遺志を祖述しつつ、ひたすら聖人に倣って生きることの貴さを説いたのである。

聖人の活動は必ずしも順風のもとに功を成すとは限らない。歴史上に伝えられた聖人は、時に時勢に受け入れられず、往々にして迫害すらうけている。しかし、廣池は聖人の生き方に注目し、その生き方に倣うことよって茨の道をも歩み続けることができるとの確信を得たのである。また、昭和六年には、次のような漢詩に自らの思いを託している。

正法湮滅して異端旺んなり

世を挙げて蕩々と名利に耽る

満腔の至誠は施すところなし

山水に隠れて不朽の道を樹つ³⁾

つまり「正法」（聖人正統の教え）が失われ、異端の教えが天下に満ちている。世の中を見渡すと人々は蕩々として名誉や利益のみを求めることに夢中になっている。胸一杯に満ちた至誠の心は、それを施すべがない。そこで自分としては山間の僻地に身を置いてモラロジ（道德科学）の研究を深め、聖人正統の教えを現代に、そして未来に伝えるための礎を築くことに全身全霊を賭けたい……、という心情を吐露しているのである。

この漢詩が作られた昭和六年は、『道德科学の論文』も一応完成し、念願の学校・研究所の構想を視野に

入れ、モラロジーによる教育活動を全国的に展開し始めた時期である。必死に道を説き、ひたすらに聖人の道を歩もうとしているにもかかわらず、世間の理解は十分でない。人としてあるべき道を説き、日本の将来を平和に導くことを目指しているのだが世間は見向きもしてくれない。世の中を平和に導き、ひとりでも多くの人を救いたいという胸いっぱいに満ちた慈悲の心は、それを發揮する場すら与えられない。「施すところなし」ということばから、廣池自身、人の世の不条理を味わっていることが窺われる。しかし専心モラロジーを通して「不朽の道」を説き続けたいという決意を表明したものである。それは先に引用した『史記』に記された孔子の生き方に重なるものであった。このような境遇の中で、廣池は神の導きを確認しつつ『道德科学の論文』を公刊し（昭和九年）、モラロジー教育の組織的な展開を進め、さらに道德科学専攻塾を開設したのである（昭和十年）。それは祖述という生き方の賜物であった。

さらに廣池の「日記」には、自分自身の人生を振り返り、次のような一文を記している。

小生は世界諸聖人の教えに本づきて、自己の最高品性を完成することに努力す。人心の開発もまた自己完成のためにして、自己まず完成されざれば、その言行いかに美なるも世を益せずとの聖人の教えに本づきて努力しつつあり。（中略）

小生は財力なく権力なく、ただ神様と聖人との御徳にすぎり、自己の修養を目的として平和、寧靜の極めて消極的の貧しい生活を致して居ります。故に小生の下に集まる人々の数は、一般宗教団や修養団や貴下の団体のごとく多からず、また盛んならず。しかしながら、その人々は皆神様と聖人にすぎり、至誠、慈悲、温和、真面目なる方々のみにして、真に君父、国家に報恩せむとする志を有し、小生に対

しては親子の情有しておりませう。さればかかる人々は、求めざれどもおのずから永遠の安心と幸福とを得つつあり。(中略)小生は天祖の御聖徳たる慈悲寛大自己反省を心懸け、日々自己を反省して聖人を学び、日に月に聖人の徳に向かいて進まむとして努力しつつあり。⁽⁴⁾

この文は、或る宗教団体を主催する人に宛てた書簡の下書きである。文中で聖人の教えに本づいて努力しつつあるということを繰り返し説いているように、廣池は道を体得するか否かということよりも、その聖人を敬慕し、その遺志を祖述すること自体を自負しているのである。そして『道徳科学の論文』の中で、先に引用した孔子の事蹟を踏まえて

私が多年困難の地に立ち、非難攻撃の渦中にありながら、常に内外に向かい毅然として聖人正統の教えを固執強調するゆえんはこの理由であります。むかし、子貢、陳蔡の困厄のとき、孔夫子に勧め、少しく教えの程度を低くしてはいかがやと説きしも、夫子(孔子)、顔回共にこれを許さなかつたのです。⁽⁵⁾

と述べている。つまり、孔子の生き方を「祖述」したいという信念を貫くことによって、時として迫害を受け不条理に憤ることがあつたとしても、それを天与の試練として正受し、自らその責めを負うことができたのである。

(二) 父母の教え

廣池は、生前、周囲の若者に、折にふれて自分の歩んできた道行きを話し、「最高道徳」の世界を味わうに至った経緯を語っている。その中に少年の頃、両親より受けた薫陶の内容に触れたものがある。まず父半六よりは

神仏のような精神の持ち主になれよ。全てのものを慈しみ、育てるといふ精神を持って行動せよ。それが本当の人間じゃ。分かったか。⁽⁶⁾

と再三にわたって諭され、母りえより

お父様の言うことを守って、そういう人になることですよ。世の中で出世した人を見てみると必ず親孝行をした人ですよ。親孝行をしなさいよ。親孝行は親のためではありません。あなたたちのためです。⁽⁷⁾

と「孝は百行の本」の教えを徹底して受けたという。半六は熱心な浄土真宗の信徒であり、その阿弥陀如来へ皈依する姿は、廣池の育った家庭教育の骨子を示すものであった。しかし、半六は阿弥陀様にすぎりなき、仏教を信仰しなさいと指導するよりも、「如来の心」、「神仏のような精神」を持つことに努力するようにと指導しているのである。

現在、半六の心情を書き留めた遺稿が保存され、浄土真宗の信徒としての決意を読み取ることができる。その中で、阿弥陀如来の恩恵に浴し、その教えに接することができた恩に対して、「何とかして御恩に報ぜんものと思い、心に鞭打ちはげむよりほかなし」と記している。先に引用した「神仏のような精神の持ち主になれよ」という言葉は、仏の道を学び、それを実践しようとする父の言葉であるだけに説得力があつたにちがいない。そして、その教えに従うことが「真の孝行」であると母親から諭されているのである。

後年に廣池は、「神様のお手伝いをさせていただく」、あるいは「神様の仕事を助ける人になれ」という言葉を再三語っている。⁽⁹⁾ 神様の手伝いをする人、神様の仕事を助ける人とは現実社会において神の心を実践しようとする人、すなわち「聖人」のことである。聖人とは所謂四（五）大聖人を指すと同時に、目の当たりに見た仏の道を説いて歩く父親の姿でもあつた。『浄土往生記』に示された父の真摯な求道と救済の生き方こそ、廣池が最も身近に感じた聖人の生き方であつたのである。よって、

思うに不肖の私が今日神を信じ、聖人正統の教えを中興して自ら最高道徳を実行し、遂に新科学モラロジーを建設するとき偉大なる人類的事業を創始するを得たりしは、全く亡父の誠実なる信仰の余沢によりて神仏の加護ありし結果と謂うの外無きなり。是をもつて予は今更に深く神仏を始め、亡父及び亡母の靈に対して感謝を禁ぜざるところなりとす。⁽¹⁰⁾

と感謝の言葉を述べている。この文章は、廣池六十一歳の時の記述であり、父親在世中にどのように考えて

いたか分明ではないが、家業に励み、仏を信じ、家々を回って仏法を説く父の姿は、若き日の廣池の脳裏に鮮明に焼き付けられていたのである。「自ら実行を期してのちはじめて聖人を思う」という言葉を遺しているように、⁽¹¹⁾その教えに従って実践を試みようとするほどに、聖人の心の深さ、人格の高さといったものを感じとり、聖父への敬慕の念を深め、母の教えの尊さを実感していったのである。

要するに、廣池にとつて聖人に倣い、慈悲の心を抱くことを志したのは、父の「神仏のような精神の持ち主になれ」という教えと、母の「孝は百行の本」という教えとに基づいて日々の生活を送ることであったということを見落してはならない。そして、この意味において自らを成長させてくれた恩人として父母に感謝しているのである。そこで、最晩年に至り（昭和十二年）、「父の肖像に題す」という漢詩の中で

慈眼温顔、円満の相、威ありて猛からず、已に聖人

と記している。⁽¹²⁾父の人格は、深い信仰心に支えられ、三十年に亘る救済活動を通して如来の道を求めた求道の生き方により高められ、ついに聖人の域に達しているというのである。廣池の聖人を祖述しようとする意は父母の遺志を祖述することによって、より確固とした信念となっていくと考えられる。このように廣池の人生を通して考えてみると、「祖述」とは、自分を育てた親の生き方を通して聖人の道を自分の立場や境遇に即した形で考え、その生き方に倣うということの意味していると言えよう。

親の生き方のどの部分に聖人に通ずるものを見出すか、それは個人個人異なっているものであるが、その見方の一つを示唆しているのが廣池の生き方であると考えられる。真の孝道とは「父母・祖先と親との心を

体得することにある」という晩年の教訓は、「孝は百行の本」という母の教えを終生の座右の銘とし、父の教えに従い神仏の心を体得しようとすることによって、確信されていった廣池の生涯に一貫する信条である。

祖述という生き方 以上述べてきたことから「祖述」という人生への取り組みには、神・祖先・両親を敬慕し、その見守り、守護を確信する心によって支えられているという自覚が不可欠であることを知ることができる。言い換えれば、常に神仏や親、祖先に見守られ守護されているという確信が「安心」の心境を得て、祖述という生き方の原動力となるのである。

晩年の「日記」には、この神の守護、神の導きを信じることについて、次のように記されている。

大正元年十二月六日、二十年延命の御願いより、ここに二十五年の歳月を経たり。神様のモラロジー大
成に対する御守護のほど感謝のほかなし。この上幾年の延命を許さるや、すべて神慮のままなり。昨
夏の大患以来、今一度世界人類の今日の混乱に対して、奮進これを救済したしとの御願いを致し、やや
回復の方に向かい、ついにモラロジー経済学のレコード吹き込みの端をも開くを得たり。この上御守護
あらば、全人類の人心救済のため飽くまで努力を惜しまざる決心なり。⁽¹⁵⁾

この御教え（モラロジー）は人間の心や人間の力にて出来たものでなく、また広がるものでなく、神様
の御心にて出来、神様の御手引きにて広がるものと考えざるほか考えようなし。恐れ入りたることなり。⁽¹⁶⁾

晩年の「日記」に記されたこのような記事は「祖述」という生き方が、神の守護を確信するという信条によって支えられたものであったということを示している。そして聖人の生き方に倣った人心救済への努力は、聖人に倣い神の守護を心静かに祈りつつ行われたものであり、そのことが廣池の説く道徳に深みを付与することとなったのである。

廣池は、常々聖人を祖述し、聖人に代わって人心の救済に尽力するという意思を表明している。しかし、人心の救済を善行であるとか、道徳の実践であるとか言うように考えるのではなく、そのとらわれさえも超越して、人心の救済そのものが自分の生き方と一つになった「¹⁷体得」の心境に達している。「心機旺盛にして、世を濟うを樂しみとなす」という言葉を遺しているように、¹⁷聖人の人となりを敬慕し、その徳に繼り、その教えに従い、人心の救済を樂しむという高い境涯をめざしているのである。

このような「聖人に倣うことを悦びとし、人心の救済を樂しみとするという境地」こそ、廣池が目指した慈悲の心であった。そして、この境地に到達することが出来たのは父母の教えによるものであったと自覚しているところに廣池の人生に一貫する「祖述」という生き方の原点を見出すことができる。

世に偉人といわれる人に共通するのは、その人生を一貫した信念をもって貫いた点にあるといわれる。そして、その一貫するものが、人々の心を打ち、感銘を与える。以上述べたような「祖述」という生き方を貫き、更なる更生を求めることこそ廣池博士の七十二年間の人生を一貫する信念であり、その生涯を通して示された最大の教えである。

三 「更生」の意義

聖人を祖述しつつ更生を目指す廣池は、その教学を『道德科学の論文』として体系化すると同時に、「更生館」を設けモラロジーを学ぶ者の修養の場とした。ここで改めて「更生館」を設けた廣池の遺志を通して「更正」の意義を考えたい。

(一) 更生館の意義

廣池千九郎は道德科学専攻塾の開塾式当日（昭和十年四月）の大食堂における第一期科生に対する講話の中で、次のように述べている。

更生殿は誰が行ってもよいのであります。いろいろ腹が立つとか、家から何か言うて来たならば、更生殿に行つて舌を上曲げて自然に息をすると静座が出来る。私は寝ておつても治まるが、他の人ではないので、じつと更生殿におれば、心が治まってくる。腹が立たぬ内から、来た事を忘れるのであります。度々行くのでますます好くなるのであります。立つておつても出来る。こうせねばならんと言う事はない。私はこうしてやってきた。⁽¹⁸⁾

「更生殿」とは、更生館の創立当時の呼び名である（名称については後述する）。日常生活の中で気にかかることや、腹立たしいことなどがあつたならば「更生殿」に行き、静座し呼吸を整えることによって「心を治

める」ことができる。「心を治める」とは葛藤する心の内を鎮めることであるが、一度や二度、静座したぐらいで心が鎮まるはずはない。何度となく更生館に通うことによって心が静まり、やがて我を取り戻し、ポジティブな考え方となり、心が楽になると指導しているのである。

ここで注目したいのは昭和三年十月十六日の「日記」に記されている次のような記事である。

形の上に活動しては、たとい著述出来ても、深遠の理を文字に含ましむる余裕なし。故に心身に間暇ありて、瞑想深思する必要あり。¹⁹⁾

「心身の間暇」とは温泉をめぐる療養に努めなければならない時間であり、「幸いにして病を得た」という運命の自覚に基づいた精神的なゆとりである。このような心身の間暇が与えられたからこそ瞑想し深く思索することができ、そのことによって執筆している文字に「深遠の理」を籠める事ができ、生命を与えることができたと述懐しているのである。大正時代の『廣池千九郎日記』の記事を見ると、病床に伏しつつ、前途の不安に焦燥感を抱き、日々葛藤を繰り返し、その度ごとに心を治めることに尽力している有様を如実に知ることができ、廣池にとって病床に伏し、人心の救済に尽力し、「道徳科学」の樹立へのひたすらな努力は、先に述べたように父母、および聖人の遺志を祖述し、常に神と対峙しつづおこなわれたものであり、それは、そのまま更生のための修養の場であった。

私たちは人との関わり合いにおいて切磋琢磨すると同時、孤独の中に身を置き神および伝統のなかかわりにおいて自己を見つめるということが大切である。右記に紹介した「心身の間暇」があつて始めて「深思瞑

「想」することができたという廣池の体験に倣い、更生館を設立しようとした遺志を感じつつ、更生館に座し修養することによって自分を取り戻し、新しい自己の発見への意志を抱くことが出来るのである。

更生するためには単に説教を聴き、研究を深め、人心の救済に尽力するだけでは不十分であり、さらに自らを静かに振り返る場が不可欠であるというのは、廣池自身の体験から出た言葉である。この体験を踏まえて、日常の煩瑣な出来事に追われている私たちに「瞑想深思」するための場として更生館を設けたのである。

「更生館」の由来と名称 大講堂が設立された当時（昭和十年）、正面に「神壇」と「学祖宣誓壇」が設けられ、それに併設されて板の間があり、「最高道德」の教えを刻んだ掲板と小さな机、そして座布団が置かれていた。この部屋を最初は「更生殿」（こうせいどの）と称していたのであるが、廣池は宗教的な名称であるとして「更生館」と改称した。

まず、「更生殿」を「更生館」と改称した廣池の遺志を確認しておきたい。このことについて、昭和十二年二月十日の記事に、

更生館は、もと更生殿と称せしも類似宗教の疑惑を受ける恐れあるをもって、今回、修養更生館と改めたり。但し聖人正統の教育は人間をして最高道德によりて、その精神を開発し且つ救済して、これを更生せしめ、以って神意に同化せしむるに在り。されど今日一般の思想上にては更生とは宗教上専有の語のごとくに誤り考うる傾きあれば、今回これを修養更生館と改称せるなり。⁽²⁰⁾

と記されている。類似宗教との区別は廣池がその晩年に最も気を配った問題であった。なぜならば、私たちが願う自らの人生の安心と幸福は、単に祈りとか、信心といった精神的な世界に浸ることによってもたらされるものではなく、あくまで日常生活における道德の実践によって実現していくものであった。つまり更生館に来ることによって安心と幸福が自然に与えられるのではなく、聖人と称される人によって開示された神の心を、我が心に修め祖述しようとすることによって、日々の生活が道德的なものとなり、その結果、安心と幸福に満ちた人生を歩むことができるのが廣池の立場である。

この立場を徹底させるために「殿」を「館」と改め、一人ひとりの身を修め、豊かな精神を養うための「場」であることを了解してもらったために「修養」の二文字を冠し、またモラロジーを学ぶ者としてのさらなる更生の意思を確認して貰いたいということから「会員修養更生館」と称している⁽²¹⁾。さらに神の心に淵源し、聖人によって開示された「純粹正統」の教えに基づいてわが身を修めるといふ目的を明確にするために「正統更生館」とも称している⁽²²⁾。これが新装された現在廣池千九郎記念講堂の北側に設けられた「更生館」の由来である。

神壇と更生館 「祖述」の対象となる聖人の行動と思想は「神」の意思を継承しているということが最も重要な条件であった。『道德科学の論文』の中で「神（天）に対する孔子の信仰」について触れ、孔子の「道」を伝え、道に志す人生が「天」への絶対的な信頼（天に対する信仰）によって支えられていたことに注目している。ひたすら天を信じ、天命に従い人事を尽くす無私の生き方こそ聖人の生き方であることを孔子から学び、祖述の意思を固めたのである。

よって聖人の言動を祖述するとは、神から聖人へと受け継がれた精神を祖述することであり、従って更生

館には必ず神壇が併設されるのである。そこで神壇とのかかわりを理解するために、次のような教訓を發している。

人間が動物性から神の性質に生まれ変わる方法はどうすればよいかと云えば、古来東西に神様を信じてその御力によって更生させていただくのように信ぜられて居るので、これがそもそも宗教の始まりであります。然るにそれは間違った考えであるので、聖人正統の御教えによれば人間の更生は人間が神様を信じ、その御精神に同化して自ら不完全ながら神様の御心と御行いとを實現するように為ることであるのです。⁽²⁴⁾

つまり「信仰本位」と「道德本位」とを対比し、神への純粋な信仰心に根ざした道德の實踐を積むことによって「更生」していくことを説いているのである。⁽²⁵⁾

学祖宣誓壇と更生館 神壇とともに併設された「学祖宣誓壇」には廣池千九郎の写真が置かれ、その前にぬかづくことによつて「栃尾又の大病」の時に廣池が、神と人に「人心の救済」を誓った言葉、すなわち「我身今日神の御傍に帰るとも誠の人をいかで見捨てむ」の文字に込められた廣池の意思を知るのである。そしてこの救済の心に報いようと決意した時に、私たちは「伝統本位」という実践の指針を自覚することができ、神から聖人へと受け継がれた遺志は「伝統」への報恩という精神をいざくことによつて現実社会における道德の實踐となるのである。そこで、次のような教訓の意味が重要な意味をもつてくる。

伝統尊重の慈悲至誠心なくして、只自分の利益の目的の為に勢力ある人や伝統の周囲に居る人に媚びる如きは陋劣にして無効なる行為なり。伝統本位の純真の行為以外は神様の御心に適うものにあらず。故に罪を天に獲れば禱る所なし。天地の法則、天地の公道、若しくは万有進化の法則は宇宙根本唯一の神の御心なり。此下に種々の系列あり。而して各伝統の個人の行いには優劣あるも、凡そ人間としては、その所属伝統に奉仕しつつ根本唯一の大神の御心に適う行いを為す人が最後の勝利者と為る。予の過去の⁽²⁶⁾ 徑路^{トモダチミチ}を併せ見るべし。

「予の過去の徑路」とは、信仰を求めた求道の生活により心身ともに救われたことに対する報恩の道程を意味している。つまり神の心によって自分を救済してくれた人が「伝統」であり、その「伝統」から受けた恩恵に対して報いたいという歩みこそ、廣池が最も貴んだ生き方であった。この一文より、神・伝統そして自己というかわりを尊重する廣池の立場は、自らの体験を踏まえたものであることが知れよう。このことについては拙著『廣池千九郎の思想と生涯』第三章・四章にて詳述した。

さらに、次のような教訓を発している。

自分の今日までの生活は全く利己心に基づいておったもの故、少しの安心も出来なかった。しかるに今回、最高道徳を聴くことを得て、真の安心と幸福とを精神的にも享受するに至ったのは、これひとえに神の広大なる慈悲心・諸聖人の教訓及び最高道徳を自分の精神内に扶植されたところの先輩のお蔭である。されば、自分がこれまで種々なる無用のことに費やしていたところの物質もしくは努力をこの偉

大なる人心救済の事業に捧げ、もってその大恩を報じたし。⁽²⁷⁾

この「大恩に報じる」という精神こそ廣池の説く道徳の要である。この神の意思とそれを祖述する伝統（廣池）の遺志とを自覚しつつ、更生館に静座することによって、その心が純化され、人生の指針を確認することができ、「安心」することができるのである。いいかえれば更生館に静座することによって、「神：伝統：自己」というつながりを自覚し、モラロジーを学ぶものとしての基礎觀念が芽生える。そこで、次のような教訓の意味が明確になるであろう。

嚴訓 更生とは利己的本能による自己本位を改めて行住坐臥如何なる時にも伝統本位に物を考えて伝統本位に行動する事なり。伝統に奉仕するとか、その伝統の氣に入るとかは自分の利益になるといふ事に心づきて最高道徳に為るのは更生ではないので、是れは形の上の転向（まきまがら）と申すものである。斯かる輩は恐るべき人物である。また利害の前に在りて懺悔し服罪して殊勝の行いを為す輩も油断（あせり）なりがたし。

モラロジーの父自記⁽²⁸⁾

この教訓と廣池の辞世に籠められた救済の心を想い、それらを経由して神の心に想いを馳せることよって初めて更生の入り口に立つことができるのである。以上のことを踏まえて、さらに廣池の言葉に耳を傾けてみよう。

我々人間が何故に更生を要するや。第一に動物性より神性に向上せねば人間に生まれた甲斐なし。第二は、我々は神様や先人がこの世界を造り文明を造って下さった恩沢に対して借財がある。これを返済せねば為らぬ。而してこれを返済するには神様の御心即ち天地の法則に依って、動物性より神性に更生して最高品性を造り、これを他人の精神に移植して人心救済を為し、以って神様の御目的を助けねば為らぬというような精神を以って更生をせねば為りませぬ。²⁹⁾

この言葉は、更生館の入り口に掛けられたものである。廣池が身をもって示した「更生」への道筋と更生館に託した悲願と遺志とを感じつつ、静かな気持ちで更生館の一室に座するとき、自らの言行を省み、純粹な内なる心に気付く事ができるのである。わたしたちは人と人との関わりあいにおいて切磋琢磨すると同時、孤独の中に身を置き、神および伝統とのかかわりにおいて自己を見つめるということが大切である。

要するに、神壇で額づき、神の心を確認し、それを私たちに伝え、救済を期す廣池の遺志に触れた後、さらに更生館に座してモラロジーの精神を徹底させるのである。このことから「更生館」には「神壇」と「学祖宣誓壇」とが併設されるのである。(拙著『人生の転機』付録Ⅲ「モラロジーの神壇について」参照。)

(二) 「更生」論の背景

ここで「更生」を説く廣池の考え方の背景を見ることによって、改めてその遺志を確認しておこう。

父母の生き方 すでに述べたように廣池は、身をもって神の心を伝えた古代の聖人の生き方を学び、病床において日々心遣いの訓練を続け、人心の救済に尽力したという体験を通して父親の生き方の重大さを知っ

た。また父の人生を曲まがに見た時、聖人に倣うということの具体的な姿を知り、その切実なことを自覚したのである。たとえば『浄土往生記』の前書きで、廣池は信仰のあり方には二つあるとし、次のように述べている。

そもそも信仰には単に神仏に祈願して自己もしくは自己と利害を同じくするものの利益を図るものと、神仏の心を体得して自我を没却し慈悲の心となり、その行動を一変し、いわゆる改心（コンヴァージョン）をなし、かくてその至誠を他人の心に移植し、いわゆる人心救済（サルヴェーション）をなすものとの二種あり。⁽³⁰⁾

父半六の生き方は、後者であり、神仏を深く信じ、慈悲の心を求め、人心の救済に尽力することこそ父半六が身を以て示してくれた、身近で具体的な聖人の生き方であった。廣池の立場からすると、仏教に帰依し自ら如来の慈悲を体得しようとして努力しつつ、「同行どうぎょう」として仏の道を説いて歩く父半六の姿と、人知れず天を信じ、自らの人格の陶冶を目指しつつ、生涯をかけて教育に情熱を傾けた孔子の生き方とは符節を合するがごとくに一致していたのである。「改心」と「更生」とは同義である。

そして、父の生き方を祖述しようとすることによって神仏の守護をひたすらに信じる心境が開け、人心の救済に努力しつつ、自己の魂の限りなき更生を期すという生き方を目指したのである。後に父半六の遺著『浄土往生記』を熟読した廣池は、「信心と思ひ思つて称えたが、まるで己が思ひ心じゃ」という父の歌について、「自ずから利己的本能を解脱して最高道徳に更生せる心境を表明せるものにて、実に偉大なる聖者の

告白として見るべき教訓である」と述べ、さらにその生涯を次のように総括している。

今、亡父の『浄土往生記』を通読するに、その信仰は阿弥陀如来の慈悲に同化せんとして努力せし跡、
 顕然明らかにして、幾度か如来の光明に撰取せられたりと思ひ、さらに日を経れば再び凡夫の域を脱せ
 ざることを悟りて、懺悔の回数を重ね、遂に日を経、年を積みて漸次に真の信仰に近づき、弥陀の大慈
 悲に同化するに至り、必然極楽往生の出来ることを自覚せられたる経路を窺うことを得るなり。⁽³²⁾

ここで大切なことは文中に「弥陀の大慈悲に至る経路」つまりその精進へのたゆまざる努力の軌跡そのもの
 に、父の生き方から学ぶものがあるとしていることである。この父の生き方は大正時代の『廣池千九郎日
 記』に見られるように聖人に倣い、日々の反省と誓いを繰り返す廣池自身の生き方と重なり合うものであ
 る。したがって、自らの体験を通して多大の共感をもって父の更生をめざす生き方に敬意を抱き、その生き
 方を祖述しようとしているのである。

廣池が、モラロジーを学ぼうとしている者に対して、自分が歩んできた道筋を学ぶように指導し⁽³³⁾、またあ
 る門人は「廣池博士ほどの努力はできないが、心の持ち方はできる」と確信し⁽³⁴⁾、廣池自身は「形はまねる
 な、心を真似て欲しい」と述べている。私たちは、廣池の生涯の中で形となった多くの業績を知ると同時
 に、その業績の背後にある聖人を敬慕し、その道をひたすら求めつづけるという「心の持ち方」、すなわち
 「両親の教えに従い、一歩でも聖人の心に近づこうとして一心に精進する生き方そのもの」に目を向けるこ
 とが重要であると考えられる。このような「更生」への地道な努力こそ「聖者」の生き方であり、父半六か

ら学んだ最も貴い教えであった。言い換えれば、道を悟れとか、道を志せというのではない。あくまで現実社会における生活のなかで謙虚に道を慕い、それを密かに求め続けるといふ人生への取り組み（心の持ち方）の尊さを知ったのである。この事実を知った時に私たちは「聖人に倣う」といふ生き方をより身近な課題として自覚し、「祖述」といふ心の持ち方をより切実な生きかたとして感じる事ができるであらう。

この意味において、廣池の「私の歩んできた道筋を学んで欲しい」といふ言葉は、「私の人生の歩みの中から、最高道徳を実践し豊かに人生を歩んでいくための具体的な心の持ち方についての示唆を得てほしい」といふ祈り、あるいは悲願といったものを示している。

釈迦の事跡 さらに釈迦の生涯にも同様の生き方を見出している。「明如日月 八面玲瓏 断除煩惱 而入涅槃（明らかなること日月の如く 八面玲瓏 煩惱を断除して 涅槃に入る⁽³⁵⁾）と記し、この「涅槃」については釈迦の事跡を範として、次のように述べている。

人間が天地の法則即ち神意によりて更生せずには、動物性そのまま死ぬるのですから、所謂闇から闇へ廻って行くので実に人間として生まれた甲斐もないのであります。そこで釈迦如来は更生の模範を示されて、自ら二度の涅槃を現わしたのであります⁽³⁶⁾。

「二度の涅槃」とは、第一が「貴族の地位を捨てて人心救済の道に入りたる時」、第二が「年八十にして肉体現世を去り、その精神が極楽に生まれ更った⁽³⁷⁾」時のことである。そして、廣池は「第一の涅槃」の重要性を、次のように述べている。

モラロジーにては生きたるままに生まれ更りて、犠牲と為って人心救済に従事する事を更生と申すのですが、これが釈迦の第一の涅槃に当たるのであります。(中略)死して犠牲と為るよりは、生きて犠牲に為るのが遥かに道徳的価値が大きいののであります。(中略)釈迦如来は貴族の地位を捨てて人心救済に入り、一切衆生を覚醒された。(中略)これがモラロジーの更生に当たるので、モラロジーにてはこれを人間として貴ぶのであります。⁽³⁸⁾

ここで重要なことは、あくまでも「第一の涅槃」すなわち現世における道徳的な行為を積み重ねることによって更生することを尊ぶという立場である。このことは先に述べた父半六の信仰に一致するものであり、日本人固有の道徳意識にも通じるものであった。

日本人の道徳意識 廣池は体験を重んじ、体験を通して思索を深めていった。しかし、その体験は長年に亘る学者としての研鑽によって支えられたものである。「更生」という問題は往年の神道に関する研究によって培われた日本人の道徳意識を前提として説かれたものである。

紀記に記された二尊の禊と三貴神の誕生の神話に注目した廣池は、この両者の関係は「吾人人類の内界の革命が偉大な結果を現すものである」という日本民族の道徳上の基礎觀念を表示したものと見て、

実に千歳の下、人類社会の一大教訓と謂うべきものであつて、我が日本民族の敬神思想、倫理思想、宗教的觀念の根本であり、出発点であつて、また最終点たることを了知すべきである。⁽³⁹⁾

と述べている。文中の「禊」は精神的な修養を意味し、その結果、「内界の革命」が成就され、その結果天照大神をはじめとする三人の神が誕生したというのである。「内界の革命」とは、人の心を神と一致する精神に立て替えることであり、「更生」という言葉に通じるであろう。さらに、「大祓いの詞」について、次のように述べている。

大祓いの詞なるものはすなわち当時禊祓の時に於いて各人自己の罪惡を神前に懺悔して、向後の心事行為を神明に明らかにする一般的誓約を後世文字に写し綴りたるものにして、今これによれば、当時その信仰の合理的にして道徳の頗る進歩せることを認め得べし。⁽⁴⁰⁾

つまり、古来日本人が神前に額づくのは「神だのみ」をするのではなく、自分の「内界の革命」(更生)を旨指して道徳の実践を神に誓うことを意味していたというのである。そして、

我が固有神道の信仰においても、人類の意思の自由を認め、且つ同時に因果律を認めたり。(中略)我が神道においては人類の意思の自由を絶対無限のものとなし、その無限の自由をもって随意に墮落と向上の二途に向かいたるものとなせり。而して墮落の極点は疾病もしくは種々の不幸、災厄を招き、而してその疾病もしくは種々の不幸、災厄を懺悔と行いとによりてこれを贖うことを得べく、而して、更にその向上の極点は、神と一致するという信仰なりしがごとし。⁽⁴¹⁾

日本人の固有の考え方からすれば、人間は各自の意思によって神と一致するほどに更生し得るのである。廣池が日々自己の運命に向かい合い、精神的な葛藤の中でひたすらに神の意思を体得したいと願ったのは、このような日本の精神文化の研究成果を経て覚醒された「精神的修養（禊）」とそれに伴う「内界の革命」すなわち精神的な修養による更生という課題の実践であった。

四 まとめ——廣池千九郎の遺志——

廣池千九郎の「更生」の事跡 人生半ばにして不治の病に罹った廣池は、その病床で「心の使い方」を模索し、人心の救済に尽力することによってのみ体験することのできる「誠」の心の存在に気付いた。つまり神の力に縋り、ひたすら相手の人の安心と幸福とを願う心の存在を覚醒されたのである。所謂「誠の意味を体得せる実験（誠の体験）」である。⁽⁴²⁾ この体験は闘病の中、闇夜の灯火のようなものであり、そのことによって自らの人生の根本的な立て替えの可能性を確信させることとなった。以後、廣池は、終生この確信に基づいて誠の心をめざして更生の道を歩み続けたのである。

そして、この重要な気付きを与えてくれた恩人に「神力無限」と揮毫した書を贈り、その書に「再生の恩を謝するため、この語を書してもって教会に奉呈す」という謝辞を添えている。「再生」とは後の言葉の「更生」に通じる。この間、廣池にとって日々の生活のすべてが更生の場であり、大正時代の博士の「日記」には、「再生（更生）」を期して日々尽力する姿が克明に記されている。

たとえば、「身をすてて、今日限り死せしものと定めなさい」と指導され、さらに「廣池千九郎をば殺してしまわねばならぬ」とも指導されている。⁽⁴⁴⁾これらの言葉は真に廣池の救済を願った言葉であり、徹底した更生を促しているのである。この言葉に対して廣池は「重ね重ねこのことは服膺して居ります。区々たる学問才知、神の前では兎戯です」と応えている。⁽⁴⁵⁾徹底した更生とは、かくも厳しい自己との対峙が不可欠であり、今まで人生の全てを擲つほどの覚悟を要するものであったのである。

このような体験を経ることによって、廣池は「更生」の真義を自覚したのである。このことについては、「自我の没却とは自己の本能に基づくところの自己の保存および発達に関する一切の欲望はもちろん、主義・主張・意見もしくは従来の偏狭な信仰等に至るまで、これを抛つこと^{なげう}であります。而してその代わりに、神及び聖人の心に基づくところの最高道德的知識と最高道德心とをわが精神に入れて、もって我が精神を改造するのであります。ただ単に最高道德の知識を得、これを利用して幸福を得ようとするのは、単なる開発を受けただけで、救済されたのではないのであります」という文に総括されている。⁽⁴⁶⁾

このように廣池は自らの体験の中で「更生」は困難な課題であるということを強く自覚すると同時に、更生の意義を確信していった。よってこの体験を経て、

人間の弱点は常に利己主義の本能に囚われておるものでありますから、たとい最高道德を聴きても直ちに慈悲の心の起るものでもなく、真に伝統を尊重する心の起るものでもなく、且つ真に人心を救済したいという心も起るものではないのであります。⁽⁴⁷⁾

と述べ、さらに「最高道徳における人心救済は人間固有の利己心を神の心と同じものに改造しようとするのでありますから、その困難は当然のことであります」とも述べている。⁽⁴⁸⁾そして、更生について「最高道徳にて更生と申すは、動物性から神性に更生して向上する事でありませう」とし、また「全て人間の一部分的性質を改めさせても、それは人間の更生ではないので、一つの転向であるのですから、真につまらぬ事であるのです。」⁽⁵⁰⁾とも述べている。

つまり、「転向」とは人間精神の一部分の変化若しくはその行為の形式の変化をいい、「更生」とは人間の利己的本能から、神様の慈悲至誠の心に生まれ変わることをいうのであるから、長い時間と全身全霊を捧げた不断の努力が不可欠であった。⁽⁵¹⁾「今日より微細の事まで空即是色の境地を開き、全然真如実相の生活に入る」という「更生」の心境を吐露するまでに実に二十年間の年月を経ていることからして、更生がいかに困難な課題であるかを知ることができよう。⁽⁵²⁾「更生」を説くモラロジーの教えは長年に亘る廣池自らの更生の体験を前提としたものである。

しかし、その困難に打ち勝ち、更生することは至高の輝きを放つ生き方であった。よって「人間各自の精神の更生にて、その身に日月の光を生ず」と述べ⁽⁵³⁾、「聖人正統の御教えによって、人心の更生を図る事は、モラロジーの究竟の目的であります」ということばこそ、廣池が生涯をかけて祖述した聖人の教えの尊さであった。⁽⁵⁴⁾

辞世に籠められた廣池千九郎の遺志、モラロジーの教えが人々を感化し、安心と幸福、平和へと導くものであるためには、それを執筆し、世に問おうとしている当人の人格・品性の程度の如何にかかわっているのだが、それは聖人を祖述し、真に更生を目指す生き方によって培われたものであった。いいかえれば自らの人

格の向上に心を尽くし更生を期することが、モラロジの教学に聖人の遺志を取り込むことであり、モラロジの教えに生命を付与することであったのである。そして、本稿の冒頭に引用した「いま一段聖者とならずば……」という意思是廣池の人生において、年齢を加える毎にさらに高まり、ついに、昭和十年に至り、

予の齡ついに古稀に達す。而してモラロジの基礎確立し、モラロジ専攻塾も四月より開校することとなる。積年の苦心至誠の結果、ようやくにして曙光を見る。

しかしながら、これを事業の上よりみれば当該事業の端緒に過ぎず。これより多々ますます至誠努力して、古聖人に代わりその大目的たる世界人心の開発と人類の永遠の平和との実現に邁進せねばならぬ。願わくは、天地神明の御照鑑、御守護のあらむことを。⁽⁵⁵⁾

という心境を開くこととなるのである。「曙光」とは、ものがごとが好転していく兆しという意味であり、「古聖人に代わって」とは、聖人の道を祖述するという覚悟を記している。聖人の道を敬慕し、その道に従おうという祖述の生き方と更生への意思は、その晩年において聖人の生き方と一致し、「聖人に代わって人類の永遠の平和を招来させる」という高い境地へと廣池を導くこととなったのである。

要するに、廣池が身をもって示した「祖述」という生き方と「更生」を志す意思、そして更生館に託した悲願と遺志とを感じつつ、静かな気持ちで更生館の一室に座する時、自らの言行を心底より省み、廣池の遺志を継承したいという意思が湧いてくるであろう。モラロジの教学は廣池の「祖述」に徹した人生と「更生」への飽くことなき意思によって生命を付されたものである。その生命を感じつつ、

とこしべに我たましひは茲に生きて御教守る人々の生まれ更わるを祈り申さむ

という辞世に接した時、更生した人の温情を感じる事ができるであろう。その時、私たちは「神—伝統—自己」というつながりを自覚するのである。この自覚こそ私たち一人ひとりを「祖述」という生き方へ導く原動力であり、「更生」への第一歩であると考えられる。

注

- (1) 大正十四年『廣池千九郎日記』三 一五〇頁
- (2) 廣池千九郎遺稿
- (3) 『廣池千九郎日記』四 七八頁(昭和六年五月五日)
- (4) 『廣池千九郎日記』四 二二四頁(昭和七年四月一日)
- (5) 『道德科学の論文』七 三七—一—二頁
- (6) 井出 大著『晩年の廣池千九郎博士』二六三頁
- (7) 同上 二六三頁
- (8) 同上 九七頁
- (9) 同上
- (10) 『浄土往生記』四頁
- (11) 『道德科学の論文』九 三九—一頁
- (12) 廣池千九郎遺稿
- (13) 廣池千九郎遺稿
- (14) 廣池千九郎遺稿
- (15) 『廣池千九郎日記』六 四—五頁(昭和十一年一月七日)
- (16) 『廣池千九郎日記』六 一—三頁(昭和十二年一月二十九日)
- (17) 『道德科学の論文』九 三四—九頁
- (18) 廣池千九郎遺稿 昭和十年四月一日
- (19) 『廣池千九郎日記』三 二—三頁(昭和三年十月十六日)
- (20) 廣池千九郎遺稿
- (21) 廣池千九郎遺稿
- (22) 廣池千九郎遺稿
- (23) 『道德科学の論文』六 一—〇三頁以下「神に対する孔

- 子の信仰」の条
- (24) 廣池千九郎遺稿 昭和十二年「更生の原理」
- (25) 『道徳科学の論文』八一—九一頁
- (26) 『更生殿説明書』一—四頁
- (27) 『道徳科学の論文』八二—〇一頁
- (28) 廣池千九郎遺稿
- (29) 廣池千九郎遺稿 昭和十二年「更生の原理」
- (30) 『浄土往生記』三頁
- (31) 『浄土往生記』二頁
- (32) 『浄土往生記』三頁
- (33) 廣池千九郎遺稿
- (34) 廣池千九郎遺稿
- (35) 『廣池千九郎日記』五—六〇頁(昭和九年八月二十六日)
- (36) 廣池千九郎遺稿 昭和十二年「更生の原理」
- (37) 廣池千九郎遺稿 同上
- (38) 廣池千九郎遺稿 同上
- (39) 『神社崇敬と宗教』二頁(明治四十四年)
- (40) 『日本憲法淵源論』全集四—四三—六頁以下
- (41) 遺稿「神道史」明治四十三年
- (42) 廣池千九郎遺稿「五十鈴河畔の教訓」
- (43) 『廣池千九郎日記』一—一六八頁(大正二年一月十九日)
- (44) 『廣池千九郎日記』一—二四頁(大正元年十二月九日)
- (45) 同上
- (46) 『道徳科学の論文』八二—三三頁
- (47) 『道徳科学の論文』八二—二七頁
- (48) 『道徳科学の論文』八二—二〇頁
- (49) 同上
- (50) 廣池千九郎遺稿
- (51) 廣池千九郎遺稿
- (52) 『廣池千九郎日記』五—六〇頁(昭和八年八月九日)
- (53) 『道徳科学の論文』八二—九七頁
- (54) 廣池千九郎遺稿
- (55) 『廣池千九郎日記』五—二五九頁(昭和十年一月一日)